



7月28日。
 まず、勇太が驚いたのは勇太がDWに行ってから戻って来るまで2日しか経っていない事であった。
 事情を聞けば2日前の7月26日、記録的な冷夏のあの日に突如としてトー横にいた3人の少年少女は、卵型のオーロラに引っ張り上げられそのまま姿を消したと言う。しかし、勇太と光が旅は正確ではないが、半年以上経っているはずであった。(そんな…俺は…夢を見ていたのか?)
 当たり前だが、他のふたりは未だ行方不明で全国的に結構なニュースとなっていたそうだ。
 トー横の警備員から警察に連絡が入り、念のため病院に連れられ、事情聴取と検査が行われた。
 身体はどこも異常なし、健康である事と小学6年生にしては異常なまでに身体が筋肉質になっているという事であった。(そりゃそうか、ずっと歩きっぱなしの旅だったし…というか、右手も右目いつの間にか生えてる?)
 正直、死んだとばかり…やっぱり夢なのか?それともあの世?死ぬ間際の夢じゃ…やっぱり今までののは夢で、ヴォーボモン達は最初からいなくて、俺は頭を打って今までどっかで気を…。
 いや!そんなはずがない!そんな事あってたまるかよ!)
 しかし、事情を聞かれている間に、さりげなくすみれさんやデジモン、電捜課について聞いてもまるで警察のひとも分からない様子であった。
 しばらくして連絡のあった家族達が勇太の元へ訪れた。
 てっきり家族だけかと思えば、両祖父母に叶の両親達まで少し早いお盆であるかのようにぞろぞろと親族が集まって来た。
 「おにiiiiiiiiいちゃああああああああん!」
 「ごふ!…日花ここ病院だって…。」
 妹の日花が顔中から分泌される体液をまき散らしながら勇太へ飛び付く。
 「勇太!」「勇太!」「ゆうちゃん!」
 その後に、母、父、祖父母達が抱きついて来る。
 「いや…みんなやめなさいよ、怪我とかしてるかもしれないし。」
 静止してくれたのは、叶の母の凜子であった。
 「そう…やっぱり叶はいないのね…。」
 「ごめん…おばちゃん。」
 「馬鹿言わないの。」
 勇太が責任感じる必要なんてないのよ…それより無事で良かったわ。
 皆んな心配してたんだから。」
 凜子が心配掛けないようにと笑みを浮かべるが、目の下に隈が見える心配しているのが伺えた。
 「…。」
 勇太は事情を話してしまうべきかとも思ったが、話したところで困惑させるだけだろうと心苦しいが言葉を飲み込んだ。



「あの…。」

奥から見慣れない初老の男女…恐らく夫婦であろうふたりが現れた。

「えっと…。」

「光の…祖父母です。」

「!」

「申し訳ございません急に押し掛けるような事をしてしまい…。」

光の祖母が申し訳なさそうに前に出る。

勇太自身の祖父母と同程度に考えると齢にして 60 かその手前。

しかし、それ以上に光の祖父母特に祖母は老け込んでいる様に思えた。

「光は…孫は帰っていませんか…あの…何か知らないでしょうか…!」

今にも崩れそうな表情であった。

手を握り懇願するように訴える光の祖母に勇太は、罪悪感が過ったが、

「…すみません…分かりません。」

「…っ。」

その言葉に光の祖母は、なんとか堪えようとしているが俯き嗚咽が漏れていた。

「ばあさん…、すみません皆さん。」

えっと…。」

「勇太です…日野 勇太。」

「すまんな勇太君。」

君だって…大変な時に。」

そう言い残すと光の祖父母は、病室を出ようとした。

「あの!」

思わず勇太は、呼び止めてしまった。

呼び止めたはいいが何を言うべきか分からず、どもってしまった。

「…あの、光…さんは、優しい子でした。」

きっと…その…大丈夫です。」

「君は…。」

勇太は様々な意味で不味いと思った。

上辺面の励ましの言葉、光の人間関係、家出をして何をしていたのか。

この言葉が、光の祖父母に様々な懸念を巡らせるに足る事を言語化出来ないまでも感じていた。

「友達です…。」

「…そうか。」

ありきたりな返答をして、光の祖父母は去って行った。



勇太は、一応の検査のため一日だけ入院し、次の日には帰宅した。
体感時間だけで言えば、懐かしの我が家であったが、遊びに行くという体ですぐに飛び出した。

向かった先は、警視庁であった。

すみれが所属していると言って警視庁電腦犯罪捜査課なら何かしらの手がかりが得られるかもしれない。

すみれと会えるなら光達の状況も知れると思い訪れたのだが、
「そんな部署ない…？」

「ああ、サイバー警察局の犯罪捜査課とかはあるけど電腦犯罪捜査課なんてないよ？」

受付の職員に聞いたところ電腦犯罪捜査課なんてない。

烏藤 すみれという職員もいないという事であった。

食い下がる勇太に困った職員が通りすがりの犯罪捜査課の職員に声を掛け今に至る。

「もしかして悪戯？そもそも捜査課にどんな用事で来たんだい？」

「えっと…前、すみれさんにト一横でお世話になって、そのお礼と思って…」

「う～ん、悪いけどウチじゃないな…ごめんね。」

結局、ほとんど追い返される形で勇太は警視庁を後にした。
(なんで…すみれさんが嘘つくと思えないのに…やっぱり、俺どうにかしちゃってるのか…？)

「変な子でしたね。」

「なんか、どっかで見た気がするんだけど…どこだっけ？」

「…。」

勇太の後ろ姿を対応した捜査課の職員は無言で眺めていた。

それからと言うものの勇太は、都内特に新宿区の神隠しの噂がある心霊スポットや DW に行く事となったト一横を巡った。

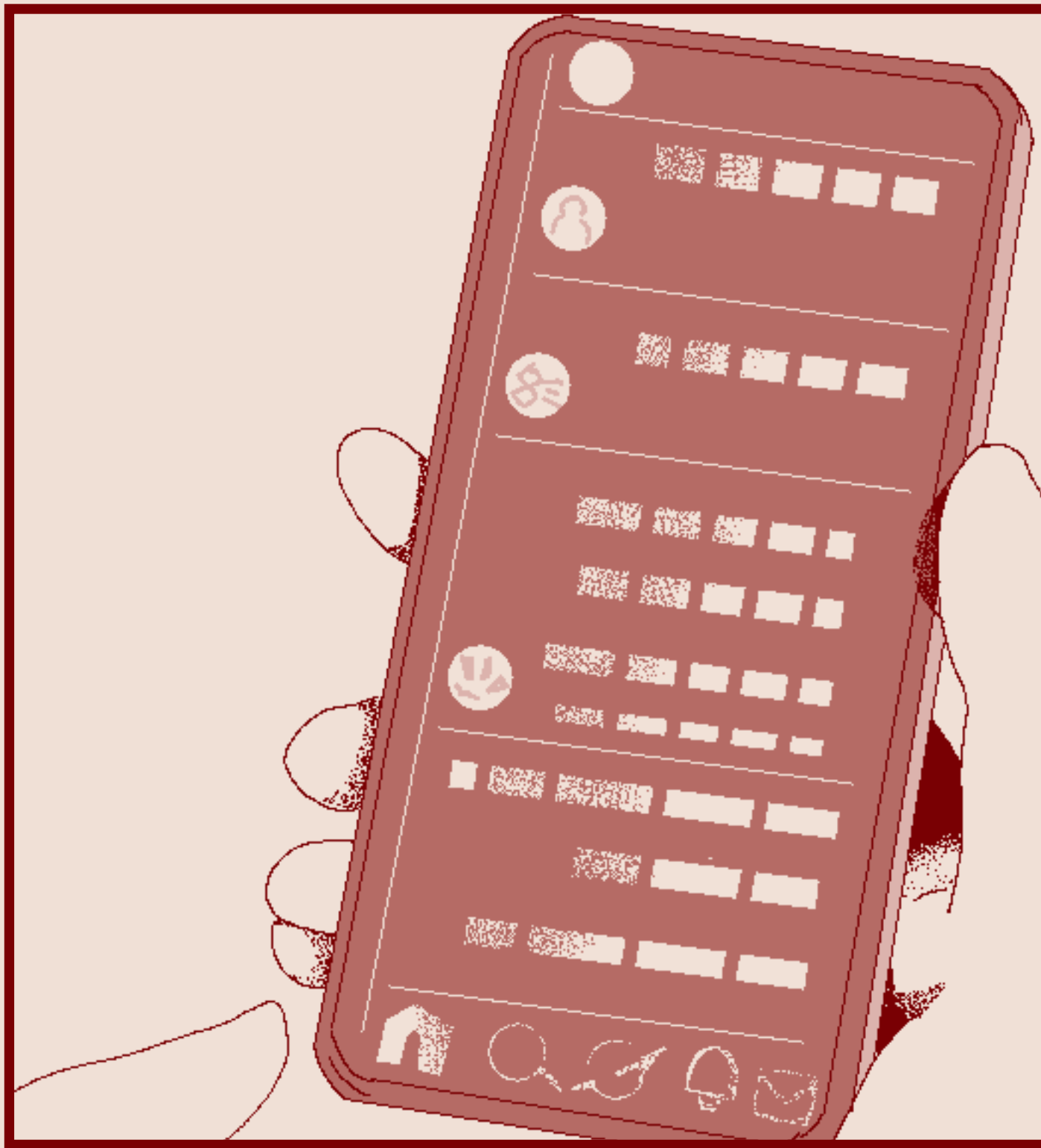
もうこれくらいしかできる事が思いつかなかった。

しかし、そんな簡単に見つかる筈もない。

遭うとすれば心霊スポットを巡るデジチューバーくらいや不良グループであった。

ニュースになり、下手に名前が広まってしまった勇太は、それらに絡まれる事もしばしばであった。





両親にまだ早いと言われていた SNS を開設し、神隠しに遭った少年として顔を出した。
(竜馬さんや、クロウさん…颯乃さんは、あんまり SNS はやってなさそうだけど、特に慎平さんならやってそうだし…デジモンも匂わせればこっちのタイマーの誰かに接触できるかも…。)

しかし、誰からも連絡はこず、来るのはやはりデジチューバーや、興味本位のオカルト好きくらいであった。

(ていうか、俺…滅茶苦茶叩かれてる。)

いつの間にか廃墟にいたのを隠し撮りされていたのか、拡散されており、たったの数日で話は明後日の方向へ行き、神隠しに遭ったのも自作自演のインプレ稼ぎのプロモーションをしているのがまるで真実のように拡散されていた。

(全然関係ないひとが俺って事になって実名と顔晒されてる…マジかよ…。)

結局申し訳なさから拡散されているのは別人とポストしてからアカウントも消してしまった。



勇太は、自身がどこかうぬぼれていた事を悟った。

苦境を乗り越え、叶と和解しデーモンを倒し、光を取り戻した。

自分には、力があるのだと。

しかし、現実に戻りデジヴァイスとパートナーを取り上げられればそこにいるのは、ただの12歳の少年でしかないと。

(土井さん…フレアモンさん…俺、どうしらいんだ。)

夕日の薄暗さがそのまま勇太に影を落とした。



結局、1週間程は歩き回ったが何も成果は得られなかった。

8日目、遂に勇太はその日動く事ができなかった。

ソファで横になりただ茫然と天井を見ていた。

そこに、日花が乗っかかり勇太のスマホを弄りだす。

日常、今まで勇太が過ごしていた日常であった。

「日花…俺のスマホ。」

「え～プリキュアの動画観たい。

…ねえお兄ちゃん。」

「うん？」

「お母さんもお父さんも皆んな心配してるよ？」

帰って来てから毎日どっか行って…叶君の事自分の所為だって思ってるんじゃないかって。」

「…。」

「ねえ、お兄ちゃん…もうどこもいかないよね？」

「…。」

日花の声が少し曇っている、心配しているのが分かった。

(そうだよ…これ以上皆んなに心配掛けて…それに、俺に何ができるんだよ。)

「…いかないよ。」

(もう…忘れよ。

全部…そうだよ…全部…夢だったんだ。

忘れなきゃ…。)

「…。」

瞬間、勇太の脳裏に浮かんだのはヴォーボモン、デビドラモン、アンティラモン、サンドリモン…そして、光の顔であった。

「…。」



「なにやってるんだろ俺…。」

結局、勇太は新宿にいた。

日花が不安そうな顔をしていたのを振り切り結局手がかりはないかと探し回っていた。

無駄だと分かっている光の顔を思い出すと足が動いた。

しかし、当てがあるわけでもなく、ただ歩を進めるのは DW で一日中、時には光をおぶっていた時より足が重く感じた。

漫然として焦燥感が疲労を実感させていった。

ポールにもたれ掛かり飲み物を飲む。

蝉の声と暑さ、喧噪がより疲労を実感させていく。

「…ひ…の君」

喧噪に紛れて自分と呼ぶ少女の声が聞こえた。

「光!？」

勇太はその声にとっさに反応して反射的に光の名前を呼んだ。

「…ひか…鬼塚さん？」



そこにいたのは、光ではなく濃い赤紫の髪色の少女、結月 茜であった。
茜は、小学2年生の頃に勇太の学校へ九州から転校してきた少女であった。
生真面目で強気、学級委員長で渾名もそのまま委員長。
勇太と価値観が似ており、光に対してのクラスのいじめに近い空気や態度に対して逐一噛み付いていくタイプであった。
しかし、勇太と違うのは、光相手にも真向から注意をするため、そのまま喧嘩になる事もしばしばあった。
また、光の罵倒は馬鹿、アホ等苛烈ではあるが語彙が少ないためある意味慣れてしまえば効かなくなるが、茜は頭が回る為、理路整然と強い言葉で詰められるためかなり効く。
普段ぼーっとしがちな勇太は、昔からよく茜に。注意と言う名の突っかかりに遭っていた。
それゆえに、勇太は茜の事は尊敬はするが少し苦手であった。
「…いつの間にか、鬼塚さんと仲良くなったの？」
「い…委員長、なんでここに？」
「はぁ!? そりゃあクラスメイトが行方不明になったら心配するに決まっとろ！」
茜は、普段標準語で話そうとするが感情的になると生まれの博多弁が出てくる。
(こりゃあご立腹だな…ええ～なんで?)
「クラスラインも一言だけやし、ここ最近新宿うろちょろしと一って言うけん、なんか怪しか事に巻き込まれてなকাশ…学級委員として、様子見に来たとよ！」
「あはは…すんません。」
「…まあ、元気そうでなによりだけど…ちょっと隈できてる？」



「えっそうかな？」

「そうよ！大丈夫？病院とかちゃんと診てもらった？」

「あはは…一日検査入院したけど健康だって。」

「そう…じゃあ、夏休みだからって夜更かししてるんじゃないでしょうね？」

茜が勇太の隣に陣取る。

「う～ん、ちゃんと寝てると思うんだけど…うち9時にはみんな寝ちゃうし。」

「ふ～ん。」

「そうだ、これ使ってみたら？」

そういうと茜がスマホのアプリを起動して見せる。

「なにこれ？」

「知らないの？厚生省から出てる健康アプリ。」

AIで身体の様子じゃなくてメンタル面の状態も把握できるってやつよ。」

「はえ、なんか委員長おば…母さんみたいな使ってるんだね。」

「…今、なんか失礼な事言わなかった？」

「…断じてそのような事は…大変大人な方と思われます。」

「ふん！…それより日野君、今日もう帰るの？」

「え？あ、うん。」

「そうだね…特に用事もないし。」

嘘ではないが本当でもない。

ただ、茜がいる時点で何か勘付かれるのは、面倒なのでこの辺で切り上げようと勇太は考えた。

「じゃ…じゃあ…しえっかくやし、どっか…その夏休みやし…。」

「？」



勇太は委員長の言葉が頭に入ってこなかった。
人混みの中で男がこちらを見ていた。
何か周りの人間と違う。
清廉潔白のように見えて威圧感と存在感を放つ、そういった存在を勇太は知っていた。
「聞いとーと!?!」
「あたたた!!!?!!」
委員長に耳を引っ張られ、勇太は我に帰った。
「他人の事ジロジロ見て良うなかばい…！」
それに、あのひとあんまり見ない方がいいとよ。」
「?」
「胸のバッジ、アレ最近問題になってるキリスト系のカルト団体のバッジよ。
信者の家族が、疾走したってこの間ニュースになってたのよ。」
「え、ああ。
そうなんだ…じゃあ離れ…」
まるで周りなどいなかったかのように男は勇太達の前に立っていた。
「!」
「…な、な何か用ね!?!」
茜も驚いたがそれを隠すように強気の態度で応えた。
「日野 勇太君ですね。」
「…知らないひととは話すなって母さん達に言われてるんで。」
男は張り付いたような薄ら笑いをしながら喋る。
勇太は、隙を突いてすぐに人混みに紛れて逃げる体勢を取った。
「本当は、時が来るまで静観するつもりだったのですが、何やら嗅ぎまわっているようなのでこちらから迎えに来ようかと思ひまして。
さあ。」
男が勇太に手を伸ばす。
瞬間、勇太の脳裏に浮かんだのは DW で見た天使の街と天使達だった。
理論だった確証はない。
しかし、本能が走馬灯のように、既視感とこの男の正体を結び付けた。



「っ!!!」

勇太は、委員長の手を引き駆けだした。

「え?え!?なにしょっと日野君!!というか手!」

「いいから!委員長!付いて来て!あの…きっと不審者だから!」

口から出た出鱈目であるが、咄嗟に言い訳を作り勇太は茜の手を握り男から離れようとした。

「誰か!!!不審者です!!!」

しかし、誰も反応しない。

勇太達とその男だけ別の空間にいるようであった。

(なんで!?あいつらがここに!!ヤバい!ヴォーボモン達もないのに!捕まったら何されるか分かったもんじゃない!!!)



男は人混みをまるでないかのように、周りも男が存在しないかのように悠々と勇太達を歩きながら追いかけた。

男は歩いている筈なの一向に距離が離れない。

ついに、人通りのない路地裏の行き止まりまで勇太達は追い込まれた。

勇太は、委員長を庇うように前に出た。

「あなたなに？警察呼ぶばい！」

委員長がスマホを出すが、圏外。

それも繋がる筈の緊急連絡も繋がらなかった。

「なんで…!？」

「ふむ、その少女も才能は申し分ないですね。

勇太君との交配の相性も良さそうだ。

ああ、安心して下さい…勇太君は、デーモンを倒した英雄。

一般のピバリウムより、良い待遇で迎えさせていただきますよ。」

ピバリウムという言葉は初めて聞いたが、それがあの天使の街の無限に続く家々の事なのだと勇太は理解できた。

「ピバ…日野君、なんの事たい？」

「さあ…鬼ごっこは終わりですよ。」

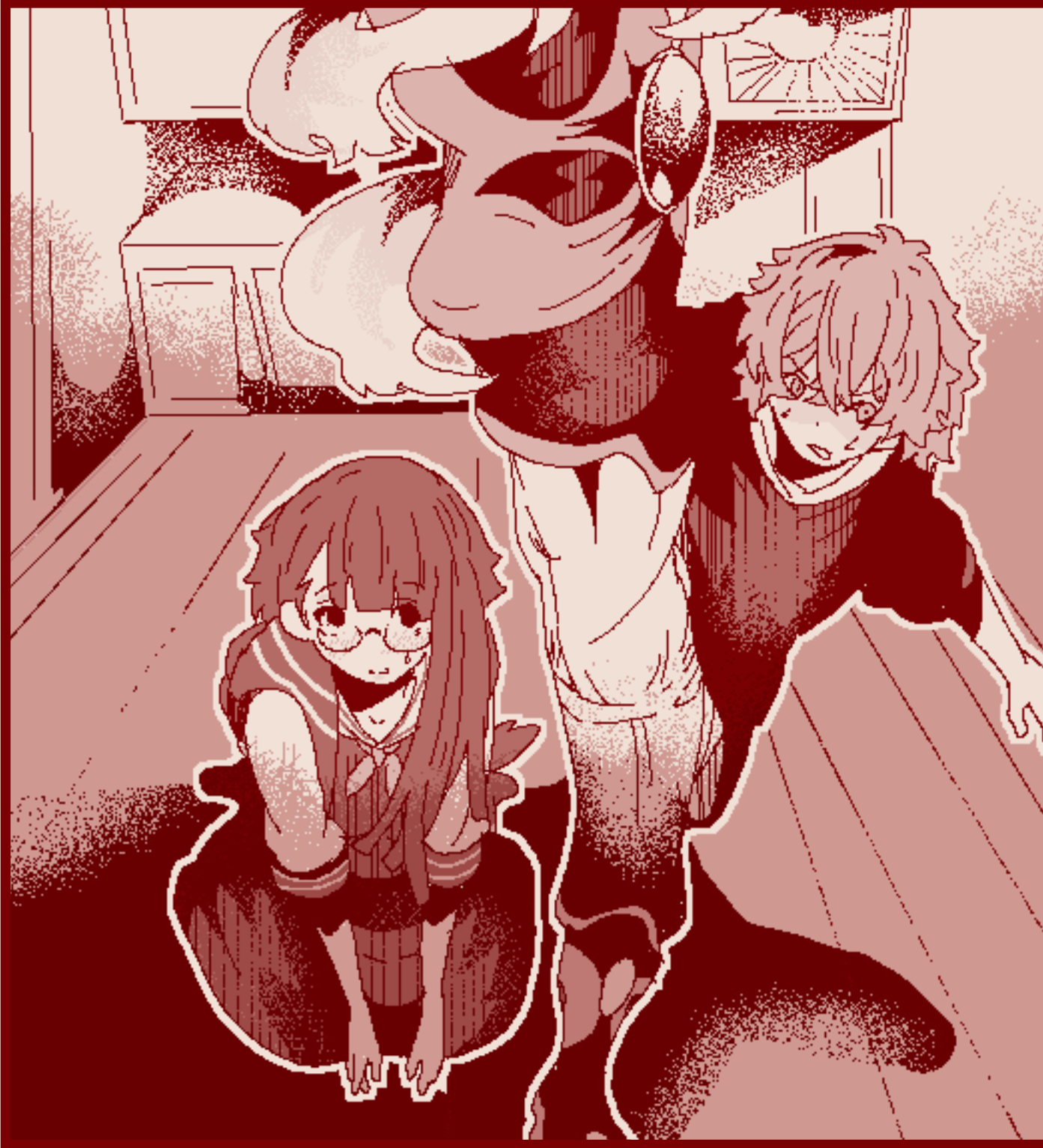
男の背中から白い羽が生え、姿が変わっていく。

「な…ななな!????」

茜は目の前の事が理解できず腰を抜かしてしまった。

そこにはエンジェモンがいた。

エンジェモンが手を伸ばし勇太達を掴もうとした瞬間。



勇太の目の前に光が満ちた。

そこには、見覚えのあるボロボロのデジヴァイスがあった。

周りを見ると空間が歪み、所々電気が走っている。

「このデジヴァイスは…!」

「ッ!局所的なゲートかですか!?!」

エンジェモンが危険を察知したのか、掴むではなく、勇太を殴ろうとする。

「!」

勇太は目の前のデジヴァイスを掴み、そしてエンジェモンの手を蹴り上げた。

「っ!」

その足は、フェアリモンの脚に変化していた。

「なっ!?ななな日野君!なにになに!!???」

困惑する茜を横に勇太は、エンジェモンを見据えた。

「成程…あくまで戦おうとするのですか。

人間の分際で…。」

「俺も状況呑み込めてないけど…色々と聞かせてもらおうぞ。

とりあえず、ボコボコにした後でな!!」

勇太の瞳に再び闘志が宿った。